

大学新入生における大学受験期の達成目標志向性と ソーシャルサポートがストレス関連成長におよぼす影響

—質的研究による検討—

竹ノ内 歩 加¹⁾・原 口 雅 浩²⁾・江 村 理 奈²⁾

要 約

本研究の目的は、大学受験期における達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響を検討することである。面接を通して大学受験期の経験がストレス関連成長につながる過程を検討した。大学1年生4名を対象に面接を行い、データはSteps for Coding and Theorization (SCAT)を用いて分析を行った。その結果、4名の面接協力者は質問紙調査、面接のいずれかにおいて熟達目標を持っており、程度は異なるが、大学受験が全員ストレス関連成長につながっていた。また熟達目標以外の目標を持っている人にも複数のソーシャルサポートが有効であることが示された。

キーワード：ストレス関連成長、達成目標志向性、ソーシャルサポート、SCAT

2020年度より大学入試センター試験が廃止され、新たに大学入学共通テストが導入された。また、これまでAO（アドミッション・オフィス）入試と呼ばれていた試験は「総合型選抜」に、従来の推薦入試は「学校推薦型選抜」に名称が変更された。さらに出願書類だけでなく、各大学で実施する、小論文、プレゼンテーション、実技、口頭試問、各教科・科目に係る試験等、もしくは「大学入学共通テスト」の少なくともいずれか一つの活用が必須化された（文部科学省、2018）。このように現代社会に対応できる人材の育成を目的として、「義務教育段階から一貫した理念の下、『学力の3要素』を高校教育で確実に育成し、大学教育で更なる伸長を図るため、それをつなぐ大学入学者選抜においても、多面的・総合的に評価するという体系的な改革」である高大接続改革（文部科学省、2019）を柱とした大学入試制度改革が進められている。

このような入試制度改革は、一期・二期校制（1949年）、共通第一次学力試験（1979年）、大学入試セン

ター試験（1990年）、大学入学共通テスト（2021年）と時代に合わせて行われてきたが、受験生にとって、大学入試は大きなストレス経験である。文部科学省（2020）が発表した平成31年度の入学者選抜実施状況によると、志願倍率は国立大学が4.0倍、公立大学が5.3倍、そして私立大学は9.4倍である。厚生労働省（2014）による平成26年度全国家庭児童調査によれば、高校生の62.3%が何らかの悩みや不安を抱え、その84.7%が自分の勉強や進路についてであった。古屋・中澤・音山（2009）によれば、受験勉強につらさを感じていた生徒は86%に達し、11月頃を境に焦り、不安、落ち込み、しんどさ、気分・身体の変調を経験する人が増加しており、大学受験期は、長時間の集中や緊張状態が強いられ、ストレスを感じる人は多い。

一方、小山（2003）によれば、大学受験をひかえた高校3年生は、大学受験に「忍耐力・精神力の向上」「自己受容の向上」「友達関係の親密化」「勉強に対する動機づけの向上」「将来に対する熟考」というプラスの

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

側面があると回答している。また堀井（2018）は、大学生の大学受験の捉え方の1つに、「達成・成長経験」があることを見出し、大学生は大学受験に対して達成感を抱き、自分の成長につながるものとして捉えていることを示唆している。このようなストレスフルな出来事を契機とした肯定的な心理的変容はストレス関連成長（stress related growth）あるいは外傷後成長（post traumatic growth）と呼ばれている（Park, Cohen, & Murch, 1986, 飯村, 2016）。

これまで竹ノ内・原口・江村（2020, 2021）は達成目標志向性とソーシャルサポートが大学受験期のストレス関連成長に及ぼす影響について検討してきた。竹ノ内他（2020）では、大学1, 2年生の178名を対象に、達成目標志向性とソーシャルサポート及びその交互作用がストレス関連成長に及ぼす影響を質問紙調査によって検討している。階層的重回帰分析の結果、達成目標志向性は熟達目標が、ソーシャルサポートではすべてのサポート源のサポートがストレス関連成長につながっていた。また達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用については、熟達目標が高い人は家族サポートが、遂行目標が高い人は友人サポートがストレス関連成長につながっていた。課題回避目標が高い人については家族サポートがないとストレス関連成長につながっていなかった。

しかし、竹ノ内他（2020）は大学1, 2年生の10月に調査を行っており、大学受験を経験してから時間が経過していた。そのため、大学での満足度などの受験期以外の大学生活の要因も影響していることが考えられる。またストレス関連成長は、時間が経ってからその時の自分自身を振り返り、評価し直すことで自分の経験が今の自分につながっている面があることに気づき、高まることが指摘されている（宅, 2014）。したがってストレス関連成長の感じ方や質問紙での評価が大学受験の経験直後と異なる可能性がある。

そこで竹ノ内他（2021）は、大学受験を経験したばかりの大学1年生を対象に質問紙調査を通して、達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響を再検討した。階層的重回帰分析の結果、熟達目標が低い人に家族サポートがあるとストレス関連成長の「他者との関係」につながっていた。また、遂行目標が高い人に先生サポート、遂行目標が低い人に友人サポートがあるとストレス関連成長の「新たな可能性」につながっていた。

竹ノ内他（2020, 2021）から、大学受験期における達成目標志向性にはストレス関連成長に影響を与える

ものと与えないものがあることが示された。しかし、ストレス関連成長につながりにくい達成目標志向性を持っていたとしてもソーシャルサポートがあることでストレス関連成長に影響を与えること、また、達成目標志向性によって有効なソーシャルサポートが異なることも示された。その一方で、調査時期によってストレス関連成長に有効な達成目標志向性とソーシャルサポートの組み合わせが異なっていた。加えて達成目標志向性とソーシャルサポート及びその交互作用がストレス関連成長に影響を及ぼす過程については検討できなかった。

そこで本研究では、面接を通して、大学受験期にどのような達成目標志向性を持ちながら学習に取り組む、大学受験に臨んだのかを具体的に明らかにしていく。さらに、どのようなソーシャルサポートを誰から受けたかを明らかにしていくことで、大学受験期の達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長につながる過程を検討することを目的とする。

方法

面接協力者

面接協力者は、竹ノ内他（2021）の質問紙調査実施時に面接協力者募集について質問紙に記載し、メールアドレスの記載を求めて募集を行った。さらに2020年9月に大学1年生を対象とした講義の中で面接協力者の募集を行った。

竹ノ内他（2021）の質問紙調査時に協力の申し出があったAさん（18歳、男性）、Bさん（18歳、女性）と、2020年9月に講義中に面接参加者の募集を行った際に協力の申し出があったCさん（18歳、男性）、Dさん（19歳、男性）の4名を対象とした。

手続き

面接協力者とメールを用いて日程の調整、面接実施の手段の調整を行った。面接の形態はオンラインと対面を呈示し、面接協力者に選択してもらった。その結果、BさんのみE大学の心理教育相談センターの面接室で対面して行い、残りの3名はオンライン会議システムのZoomを用いて実施した。対面で面接を行った際は、事前に体温を計測してもらい、面接時には手指消毒、換気を行い、マスクを着用して実施した。また、面接協力者との間にアクリル板を設置し、新型コロナウイルスへの感染症予防対策を行った。

面接時は倫理的配慮の説明を行った後、Googleフォームを用いた同意書にて面接への参加と録音につ

いての同意を得た。説明後、面接者から達成目標志向性について文書を用いて説明を行い、面接協力者の大学受験期の達成目標志向性を尋ねた。次に、質問紙調査の達成目標志向性の結果をフィードバックした。その後、大学受験期の達成目標志向性、ソーシャルサポート、ストレス関連成長について半構造化面接を行った。フィードバックをした質問紙調査の結果はAさん、Bさんに関しては2020年5月に実施した質問紙調査の結果を、Cさん、Dさんについては5月の調査と対応させることができないため、面接調査前に再度回答してもらった結果を用いた。質問紙調査では達成目標志向性尺度（光浪，2010）、ソーシャルサポート尺度（細田・田嶋，2009）、ストレス関連成長を測定する尺度として心的外傷後成長尺度（宅，2010）（「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」の3下位尺度のみ）の回答を求めた。

面接の所要時間は1人あたり30分程度であった。面接の実施時期はAさんが2020年9月、残りの3名が2020年10月であった。

倫理的配慮

面接への参加は任意であり、途中で辞退しても構わないこと、面接参加の可否により個人に不利益が及ぶことがないこと、面接で得られた内容は論文作成及び研究発表の目的のみに使用し、研究以外での目的に使用されることは一切ないこと、研究を公表する際は個人を特定できるような情報は一切公表しないこと、データは2031年3月31日まで鍵のかかる保管庫で厳重に保管し、保存期間終了後は適切に処理することを面接協力者に対して、研究の趣旨と共に文書及び口頭で説明を行った。

また録音については、録音への参加は任意であり、途中で録音の協力を拒否できること、録音に協力しないことで、個人に不利益が及ぶことがないこと、録音で得られた内容は論文作成及び研究発表の際の分析のみに使用し、研究以外の目的に使用することはないこと、論文投稿や学会発表などで録音内容について公表

を行う場合、個人が特定されない形で行うこと、録音内容は2031年3月31日まで鍵のかかる保管庫で厳重に保管し、保存期間終了後には破棄することを、文書及び口頭で説明を行った。

面接の参加、録音はそれぞれ別のGoogleフォームの同意書で同意を求めた。なお、本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会（研究番号396）の承認を得ている。

分析方法

データの分析は大谷（2008）によって開発されたSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて質的分析を行った。SCATとは、「<1>テキスト中の注目すべき語句」「<2>テキスト中の語句の言い換え」「<3><2>を説明するようなテキスト外概念」「<4>テーマ、構成概念」の4ステップのコーディングと、テーマ・構成概念からストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる分析手法である（大谷，2011，2019）。

結果

SCATで得られたストーリーラインは以下の通りである。なお下線はSCATの<4>で得られたテーマ・構成概念を示している。面接協力者の達成目標志向性、ソーシャルサポート、ストレス関連成長について、質問紙調査で得られた結果を表1に示す。

Aさん

受験勉強を大学での学びへの活用という将来を見据えた学習をしており、熟達目標を持っていた。質問紙調査では全体的に達成目標志向性の得点は低いが、他の達成目標志向性と比較して得点が高かった遂行目標は、周りの頭がいいという周囲の環境があり自分なりに頑張って比較に固執がなく、あまりなかった。

大学受験期において平日は学校で放課後学習、休日は自宅学習をしていた。志望校選択はまず受験科目選択をして、その中で興味関心があるものから専攻選択をしている。合格した大学の内、偏差値と環境の良さ

表1 質問紙調査の達成目標志向性、ソーシャルサポート、ストレス関連成長の得点

協力者	達成目標志向性			ソーシャルサポート			ストレス関連成長 (14~84)
	熟達 (4~24)	遂行 (8~32)	回避 (3~12)	家族 (15~75)	先生 (15~75)	友人 (15~75)	
A	12	18	6	46	37	39	38
B	22	30	11	59	15	70	40
C	19	30	11	54	55	55	56
D	19	20	9	58	33	73	66

から進学する大学を決定している。

大学受験期には、先生サポート、友人サポートとして質問できるという道具的サポートを受けていた。また先生（担任）サポートとして励ましなどの情緒的サポートを受けており、合格への希望を持っていた。これは感謝につながっており、第一志望以外の大学で妥協しないで、前向きに考える大切さを知るという新たな可能性という成長にもつながった。最終的に第一志望ではない現実的な志望校に行くことになったが、このことは人間としての強さという成長につながった。

Bさん

自覚している達成目標志向性として、熟達目標を挙げ、遂行目標、課題回避目標は挙げなかった。日常生活の中では最大限のことをしたいと考えている。達成目標志向性の質問紙調査の結果との差異（質問紙調査では遂行目標、課題回避目標も高くなっている）については気持ちの変化（5月と現在）があったため生じた。大学受験期にF（高校、予備校の同級生）からバカにされるといった予備校での経験がありその悔しさを晴らしたいという気持ちから遂行目標があった。第一志望ではない大学への入学や学校が始まらないきつさ（新型コロナウイルス感染症による遠隔授業）があり目標の喪失があった。また新たな目標（大学院入試）を意識しすぎ、焦り、落ち込みがある中で回答したことで大学受験期について尋ねられて思い出すものがネガティブなこと（Fとの関係）になり遂行目標が高くなった。現在は大学での楽しさの発見がある。自身のタイプは他者との比較に不向きと考えている。専攻を考えた大学選択を行っており、幼いころからの夢である心理職を目指した。心理職という目標があることで、第一志望校だけに囚われない安心感を得ていた。

集団の予備校から個人の予備校への環境の転換によって気づき（Fばかり見ているのはよくなかった）、勉強方法の変化があり、学習時の意識の変化、志望校への意識の変化、他者の見方の変化が起こった。個人の予備校では志望校を意識した勉強方法を行っていた。通信制高校での受験に向けた学習の困難さはあったが、不十分な環境（高校では受験対策をしてもらえない、高校が遠方にある）の中で1人でも学習できる力を養い、新たな可能性という成長につながった。新たな可能性は大学での学びに生かされている。また、高校の転籍から自分の行動に対する考えの変化があり（受験があっても変わらず他者にやさしくしたいという希望）他者との関係、人間としての強さという成長

につながっている。

大学受験期に受けたサポートは親サポートとして道具的サポート、友人サポートとして情緒的サポートがあったが、友人も受験生という状況なので頼りすぎないように配慮していた。親からのサポートには感謝していた。友人サポートはFとの関係に悩んでいるBさんに客観的な意見を与えてくれるもので、考えの変化が発生し、他者との関係という成長につながった。

Cさん

他者からの低評価の回避という思いから遂行目標が高かった。少数しかいなかったクラス男子との結束がありよい関係性だったが、成績の競い合いをしており友人からの評価が不安でそれが学習への原動力になっていた。クラスは大学進学を目指す人のための普通科であった。高い目標と現実との乖離から課題回避目標を持つこともあった。自分に課す圧力によってネガティブな感情になることもあったが、重圧が受験に向けての動機づけにもなっていた。精一杯やって後悔したくないし、終わった後に切り替えができるようにしたいと考えていた。受験時には効率的に学習したいという思考の変化があり、熟達目標もあった。

高3夏から通塾をはじめ誤答を徹底して対策するような一人学習をしていた。好みの学習方法で最大限のことをするという姿勢で勉強に没入し、塾での学習が高比率だった。高3の夏にオープンキャンパスに参加したことが志望校決定のきっかけで高3から、志望校への動機づけが高まった。合格圏内の第一志望校だったが、センター入試の失敗や大学入試制度の改変による環境の変化によって志望校以外の大学に入学した。

受験後の気づきとして「今は報われないかもしれないけど、後から生きてくる」という考えの変化が生じチャレンジ精神が出てきた。これは大学生生活での活用で新たな可能性という成長につながっている。

また大学受験期は両親サポートとして送迎などの道具的サポート、励ましなどの精神的サポートがあり、他者との関係という成長につながっている。先生サポートとしては志望校決定時に情動的サポートがあり、その時に自分1人で学習することの限界への気づきから頼るという行動の変化が発生し、周囲との関係の変化により他者との関係という成長につながっている。友人サポートと両親サポートとして受験のことを一時的に頭から離れさせるような精神的サポート、共行動的サポートを受け他者との関係という成長につながった。さらに先生サポートとして道具的サポートを

受けていたが、その時の先生の様子を見て精神的余裕が必要だと感じる精神的な成長、変化が発生している。他に楽曲への共感が気持ちの切り替えにつながっている。

Dさん

現役時代と浪人時代では考え方の変化があった。高3夏・秋までは成績の伸び悩みがあり課題回避目標だったが、成績向上で成長の感覚があり、熟達目標に変化していった。遂行目標については比較しないタイプであり自覚はない。課題回避目標の傾向に関しては2側面（追及すること・後回しにすること）があり苦手科目は最低ラインでいいと思うこともある。

勉強方法としては不明な箇所を先生に尋ねて（先生サポート）1人学習をしていた。浪人時代は現役時代とは対照的な勉強方法の変化が起り、自分に合う授業形態の予備校を選択している。志望校に関して現役時代は就職への有利さによって決めていたが、浪人時代に読書を通じて自分と向き合い、専攻の変更をしている。

大学受験は大きな目標（長期的な目標）を目指して努力を続ける経験になり、気持ちの変化が発生したことで打ち込めるものを見つけれられるようになっていく。これは大学生生活での活用により新たな可能性という成長につながっている。

またわからないことを聞く恥ずかしさがなくなり、他者を頼れるようになっていくことから他者との関係という成長につながっている。

苦手科目にも手を出せるようになったことから新たな可能性という成長につながっている。センター当日の失敗は自分の力と時間の経過が解決してくれた。これは人間としての強さにつながった。

先生（予備校）サポートでは道具的サポートとして大学を知る機会を得て、大学での希望が生まれた。友人サポートとしては受験勉強が煮詰まっているときに一緒に外出をして、ストレスを発散するなどの情緒的サポート、共行動的サポートがあった。

家族サポートとしては食事の準備などの道具的サポート、進路の話をするなどの情緒的サポートがあった。家族サポートを受けたことで感謝が生まれ、次は自分が助けたいという新たな可能性という成長につながっている。

考察

本研究では達成目標志向性とソーシャルサポート

が、ストレス関連成長に及ぼす影響について面接を通して質的に検討した。以下に面接協力者ごとに考察していく。

Aさん

達成目標志向性については、「受験勉強を大学での学びへの活用という将来を見据えた学習をしており、熟達目標を持っていた。質問紙調査では全体的に達成目標志向性の得点は低い^が、他の達成目標志向性と比較して得点が高かった遂行目標は、周りの頭がいいという周囲の環境があり比較に固執がなく、あまりなかった。」と話し、熟達目標だったと語った。しかし「志望校選択はまず受験科目選択をして、その中で興味関心があるものから専攻選択」していたり、「合格した大学の内、偏差値と環境の良さから進学する大学を決定」したりしていることから、質問紙調査の結果で、他の達成目標志向性よりも得点が高かった遂行目標も持っていると考えられる。Aさんは他の面接協力者と比較して熟達目標の得点が低かった。そのため、ストレス関連成長の得点が他の面接協力者と比較して低くなっていると考えられ、竹ノ内他（2020, 2021）で得られた結果と同様の結果になっている。

ソーシャルサポートとしては、「先生サポート、友人サポートとして質問できるという道具的サポート」があった。また「先生（担任）サポートとして励ましなどの情緒的サポートを受けており、合格への希望を持っていた。これは感謝につながっており、新たな可能性という成長につながった」。遂行目標が高いため、先生のサポートが「新たな可能性」に有効であるという結果が得られた竹ノ内他（2020, 2021）と同じ結果が得られている。

「第一志望ではない現実的な志望校に行くことになったことは人間としての強さという成長につながった」。これは自分の力で成長につながったと話しており、人間としての強さは自己認識の変化（宅, 2010）であり、ソーシャルサポートが大きく関連しなかったと考えられる。質問紙調査の人間としての強さとソーシャルサポートの交互作用においても、人間としての強さは家族サポートのみにしか、効果が見られておらず、竹ノ内他（2020, 2021）の結果と同じ傾向が見られた。

Bさん

「自覚している達成目標志向性として、熟達目標を挙げ遂行目標、課題回避目標は挙げなかった。日常生活

活の中では最大限のことをしたいと考えている。達成目標志向性の質問紙調査との差異については気持ちの変化（5月と面接実施時）があったため生じた」と語っている。質問紙調査では熟達目標が高かったが、遂行目標と課題回避目標も高い結果となっていた。

「第一志望ではない大学への入学や学校が始まらないきつさ（新型コロナ感染症による遠隔授業）があり目標の喪失があった。また新たな目標（大学院入試）を意識しすぎ、焦り、落ち込みがある中で回答したことで大学受験期について尋ねられて思い出すことがネガティブなこと（Fとの関係）になり遂行目標が高くなった」と話していることから、質問紙調査を実施した2020年5月は新型コロナウィルス感染症予防のための遠隔授業が始まった時期であり、親元を離れた新しい環境の中で、友人ができないままに授業を受けていたことが考えられる。面接を実施した2020年10月上旬については「現在は大学での楽しさの発見ができています」と話しており、少しずつ対面授業が増えだし、サークル活動など大学生の生活としてイメージしていたものに近い生活が始まった時期だと考えられる。質問紙調査及び面接は、調査実施時期の社会情勢や大学への適応感、満足感等の他の要因も関連していることが考えられる。

「大学受験期に受けた友人サポートとして情緒的サポートがあった。友人サポートはFとの関係に悩んでいるBさんに客観的な意見を与えてくれるもので、考えの変化が発生し、他者との関係という成長につながった。」ことを話している。質問紙調査でも他者との関係に、友人サポートの主効果が見られており、同様の結果が得られたと考えられる。特にBは大学受験そのものや、受験勉強に困っていたわけではなく、友人との関係に悩んでいた。そのため、友人サポートが有効だったと考えられる。

通信制高校に通っていたため先生サポートが受けられなかったこと、友人サポートは受けていたと話し、質問紙調査の友人サポートの得点も高いが、Fとの関係に悩むなど友人との関係がうまくいっていなかったことによりソーシャルサポートが十分ではなかったと考えられる。加えて、Bさんは質問紙調査の結果において熟達目標よりも遂行目標が高かった。竹ノ内他（2020, 2021）でストレス関連成長につながりやすかった熟達目標よりも遂行目標が高くなっているため、他の面接協力者と比較してストレス関連成長が少なかった可能性が考えられる。そこから、達成目標志向性がストレス関連成長につながりにくく、ソーシャ

ルサポートも十分でないと、ストレス関連成長の程度が低くなると考えられる。

Cさん

「他者からの低評価の回避という思いから遂行目標が強かった。少数しかいなかったクラス男子との結束がありよい関係性だったが、成績の競い合いをしており友人からの評価が不安でそれが学習への原動力になっていた」ことを話している。周りの環境によって達成目標志向性の傾向が影響を受けたのではないかと考えられる。熟達目標に関しては「受験時に思考の変化があり効率的に学習したいと考えていた」と話しており、Cさんの質問紙調査の結果からは熟達目標も高かった。そのためストレス関連成長につながったと考えられる。熟達目標が高く、ストレス関連成長につながっており、竹ノ内他（2020, 2021）と同様の結果が得られた。

「受験後の気づきとして『今は報われないかもしれないけど、後から生きてくる』という考えの変化が生じチャレンジ精神が出てきた。これは大学生活での活用により新たな可能性という成長につながっている。」気づきについてはソーシャルサポートがあったとは語られず、大学受験を経験してからの約半年間で気づいていったことだと考えられる。「新たな可能性」が自己認識の変化（宅, 2010）であることが関連していると考えられる。

Cさんは家族サポート、先生サポート、友人サポートいずれのサポートも受けていた。ソーシャルサポートを受けていたことで、遂行目標を強く意識する環境の中でもストレス関連成長につながっていたと考えられる。

Dさん

達成目標志向性については「現役時代と浪人時代では考え方の変化があった。高3夏・秋までは成績の伸び悩みで課題回避目標だったが、成績向上で成長の感覚があり、熟達目標に変化していった。遂行目標については比較しないタイプであり自覚はない。課題回避目標の傾向に関しては2側面（追及すること・後回しにすること）があり苦手科目は最低ラインでいいと思うこともある」ことを話している。竹ノ内他（2020, 2021）でストレス関連成長につながりやすい結果が出ている熟達目標を持っているため、ストレス関連成長につながったと考えられる。達成目標志向性は特性として研究されているものが多い（たとえば野崎,

2003; 光浪, 2010)。しかし D さんは変化があったと話した。「志望校は現役時代には就職への有利さによって決めていたが、浪人時代に読書を通じて自分と向き合い、専攻の変更をしている」。達成目標志向性の傾向が変化したことで、学習方法、専攻選択まで影響があり、達成目標志向性が大学受験期の行動に及ぼす影響が大きいことが窺える。

「大学受験は大きな目標（長期的な目標）を目指して努力を続ける経験になり、気持ちの変化が発生したことで打ち込めるものを見つけられるようになっていく。これは大学生活での活用により新たな可能性という成長につながっている」ことを話した。大学受験を通して得られた成長は、その後の大学での生活に影響を及ぼしていると考えられる。

「センター当日の失敗は自分の力と時間の経過が解決してくれた。これは人間としての強さにつながった」ことを話した。竹ノ内他 (2021) と同様に人間としての強さは自己認識の変化 (宅, 2010) であるため、「自分の力」の部分が大きかったと考えられる。

「先生（予備校）サポートでは道具的サポートとして大学を知る機会を得て、大学での希望が生まれた」。浪人を経験していることから先生サポートの得点は低かったが、面接では先生（予備校）からもサポートを受けていることが明らかになった。ストレス関連成長につながりやすい達成目標志向性をもっており、さらにソーシャルサポートを受けることでよりストレス関連成長につながっていると考えられる。

4名の面接協力者の面接を考察していく。面接協力者は質問紙調査、面接いずれかにおいて全員熟達目標が高かった。またストレス関連成長の程度は異なるが全員ストレス関連成長が生じていた。本研究の面接協力者は遂行目標や課題回避目標とともに熟達目標をもっていたため、ストレス関連成長につながったと考えられる。

ソーシャルサポートについては、全ての面接協力者がサポートを受けることで成長につながったことを話している。ソーシャルサポートがストレス関連成長につながっていた。特にソーシャルサポートはストレス関連成長の下位尺度である「他者との関係」につながりやすかった。「他者との関係」が他の人とのつながりの中で経験される変化の領域 (宅, 2014) であるため、ソーシャルサポートが特に有効であったと考えられる。

一方「人間としての強さ」については、サポートと

の関連は少なく、成長した場面として不本意入学となったことを受け入れたことが挙げられた。「人間としての強さ」は自己認識の変化である (宅, 2010)。そのため、周囲の人からのサポートよりも自分自身の中で解決することが多かったのではないかと考えられる。

本研究では面接協力者の A さん、B さんが質問紙調査の結果の達成目標志向性と面接で回答された達成目標志向性が異なっていた。面接を実施して達成目標志向性について説明したり、丁寧に聞いたりすることで、面接協力者が自覚している達成目標志向性を確認できた部分があると考えている。しかし C さん、D さんは面接の直前に質問紙調査に回答してもらったのに対して、A さん、B さんは質問紙調査実施時の面接の 4、5か月前に回答してもらっていた。A さん、B さんが大学入学直後と面接時に大学受験に対する気持ちの変化があったことも考えられる。実際に B さんは面接の中で面接までの期間に気持ちの変化があったと回答している。B さんの場合は新型コロナウイルス感染症拡大防止のための遠隔授業で、「追い詰められていた」ということで、大学への不応感等が関連していることも考えられる。また、今回の調査では不本意入学の面接協力者が多かった。不本意入学のため 5月の調査の段階では、大学への満足感が低かったが、面接時期には大学に慣れて新しい活動を始めている面接協力者もあり、大学への満足感が上がっていた可能性も考えられる。

今後の課題として、面接を大学入学直後とその後縦断調査を行うことが挙げられる。ストレス関連成長の評価も質問紙調査時と面接時で変化している可能性が考えられる。ストレス関連成長は、自分が直接関与することで起きた出来事の場合には、時間がたつてからその時の自分自身を振り返り、評価し直すことで自分の経験が今の自分につながっている面があることに気づき、ストレス関連成長が高くなる (宅, 2014)。大学受験は自分が直接関与している出来事のため、A さん、B さんは質問紙調査から面接まで時間が空いてしまったこと、C さん、D さんは質問紙調査が 2020年10月頃になってしまったことで、ストレス関連成長の評価が一定でなかったことが考えられる。

また、本研究の面接協力者が全員熟達目標を持っていたため、遂行目標や課題回避目標のみを持っている人の検討ができなかった。竹ノ内他 (2020, 2021) の質問紙調査では遂行目標・課題回避目標のみの得点が高い調査参加者もいた。遂行目標や課題回避目標のみ

を持っている人は熟達目標を持つ人と比較してソーシャルサポートがより必要だと考えられる。そのためそれらの遂行目標や課題回避目標のみを持っている人に面接を実施することが今後の課題として挙げられる。

引用文献

- Colhoun, L. G. & Tedeschi, R. G. (2006). *Handbook of Posttraumatic Growth – Research and Practice*, London, UK: Routledge (カルホーン, L. G.・テデスキ, R. G. 宅 香菜子・清水 研 (監訳) (2014) 心的外傷後成長ハンドブック: 耐え難い体験が人の心にもたらすもの 医学書院)
- 古屋 健・中澤 達彦・音山 若穂 (2009). 中学生の受験ストレス評価ツールの開発 群馬大学教育実践研究, 26, 129-138.
- 堀井 順平 (2018). 大学生の大学受験の捉え方と自己効力感の関連 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 67, 39-46.
- 細田 絢・田嶋 誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自我への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 309-323.
- 飯村 周平 (2016). 心的外傷後成長の考え方 – 人生の危機とポジティブな心理的変容 – ストレスマネジメント研究, 12, 54-65.
- 光浪 睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 58, 348-360.
- 厚生労働省 (2014). 平成26年度全国家庭児童調査結果の概要 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188147_00002.html (2020年1月29日閲覧)
- 文部科学省 (2018). 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について (通知) https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/11/06/1397731_03.pdf (2021年2月2日閲覧)
- 文部科学省 (2019). 高大接続改革 1-1-1 「高大接続改革」とはどのような改革ですか。 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1402115.htm (2021年2月2日閲覧)
- 文部科学省 (2020). 平成31年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要 https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00001.htm (2021年1月27日閲覧)
- 野崎 秀正 (2003). 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響 – 抑制態度を媒介としたプロセスの検証 – 教育心理学研究, 51, 141-153.
- 大谷 尚 (2008). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 – 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き – 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54, 27-44.
- 大谷 尚 (2011). SCAT: Steps for Coding and Theorization – 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 – 感性工学, 10, 155-160.
- 大谷 尚 (2019). 質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで 名古屋大学出版会
- 小山 秀樹 (2003). 大学受験生の受験に対する認知に関する研究: 受験生が考える大学受験のプラス面 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 489
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. (1996). Assessment and prediction of stress related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- 竹ノ内 歩加・原口 雅浩・江村 理奈 (2020). 大学受験期における達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響 久留米大学心理学研究, 19, 33-41.
- 竹ノ内 歩加・原口 雅浩・江村 理奈 (2021). 大学新入生における大学受験期の達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響 – 量的研究による検討 – 久留米大学心理学研究 20, 35-44.
- 宅 香菜子 (2010). がんサバイバーの Posttraumatic Growth 腫瘍内科, 5, 211-217.
- 宅 香菜子 (2014). 悲しみから人が成長するとき – PTG 風間書房

Influences of achievement goal approach and perceived social support affected stress-related growth in students through their experience when taking university entrance examinations.

-Qualitative research-

AYUKA TAKENOUCHI (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

RINA EMURA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study investigated how possessing an achievement goal approach and perceived social support affects stress-related growth in students by evaluating their experience when taking university entrance examinations. The connection between experience during the university entrance examination period and stress-related growth was examined through interviews with 4 first-year university students. The data were analyzed using Steps for Coding and Theorization (SCAT). From questionnaire surveys or interviews, all interviewees were found to have high mastery goals; in varying degrees, these have led to stress-related growth. In addition, social support (perceived support from family, teachers, and friends) has led to stress-related growth. It is necessary to provide social support that is suited to each achievement goal to promote stress-related growth for university entrance examinations.

Keywords: stress-related growth, achievement goal approach, social support, SCAT